

# 現代の芸術作品に対する理想の鑑賞態度の検討

Examining the Ideal Appreciator's Attitude Towards Works of Modern Art

人文科学系 / 美学 / 論文

芸術文化キュレーションコース

吉村 桃子

Momoko Yoshimura

現代芸術の作品が、「不謹慎だ」、「配慮に欠ける」といった指摘を受けることは、今日では珍しいことではない。2019年に開催された「あいちトリエンナーレ2019」の一企画「表現の不自由展・その後」は、そうした批判が殺到したことでとりわけ大きな話題になった事例である。また、作品を制作・展示する側が、批判への応答として「表現の自由の侵害である」、「検閲行為である」と反論するケースも増えている。しかし、そうした言及全体において、作品の内容に関する指摘や議論はほとんどなされていない。作品の理解が得られていない状態で、作品についての正しい議論をすることは可能なのだろうか。本論で扱うのは、こうした現代芸術作品への批判やバッシングに表れているような、芸術を鑑賞する態度の問題である。

現代芸術は、その性質上極めて難解なものである。同時に現在では、芸術鑑賞における多様な受け取り方や、自由な解釈も容認されている。しかしながら、難解だからといって鑑賞者が自分勝手に批判してよいわけではなく、どんな自由も全て許容されるというわけでもない。芸術鑑賞における多様な解釈を成立させるのは、作品の理解を経た鑑賞態度である。本論の目的は、この理解を伴った鑑賞態度、すなわち、現代の芸術を鑑賞するための理想の態度を明らかにすることにある。

まず、伝統的な芸術鑑賞における理想の態度として、デイヴィッド・ヒュームの「趣味の標準について」(1757年)の議論を分析していく。「趣味の標準について」でヒュームは、人々の抱く所感は多様なものであり、その感じ方には正誤を問う必要はないとした上で、「真の判断者」という存在を提示している。真の判断者とは、5つの条件を満たした、鑑賞における理想の状態にある存在である。この条件とは、①繊細さ、②実践と鍛錬、③比較、④偏見からの自由、⑤良識の5つであり、これらを持ち合わせた真の判断者の間で共通の判断がみられた場合、その判断こそが趣味の標準なのだというのがヒュームの主張である。これは、さまざまに異なる人々の趣味の多様さを認めながらも、趣味に正しさを担保させることを可能にした議論である。本論では、この議論の利点を現代においても適応させるため、18世紀の芸術とは異なる現代芸術の性質やあり方に即した条件を付加する。

現代芸術は、その鑑賞を困難にする原因を性質としてもっている。なぜなら、伝統的な芸術とは異なる価値や、既存の芸術を繰り返してきたその歴史から、現代芸術は、作品を見ただけでは理解できないものへと発展してきたからである。こうした作品を理解して鑑賞するためには、背景にある歴史的意義を知り、どんな文脈に置かれている作品かを知る必要が大きいのである。

こうした現代芸術の実相を踏まえた理想的鑑賞の要素として、まずヒュームが挙げた5つの条件を改訂する。「実践と鍛錬」、「比較」、「偏見からの自由」、「繊細さ」、「良識」のうち、後の2つは生得的な能力に依存するためそのままでは適応できない。そこで、他の条件の前提として「繊細さ」を、生得的に誰もがもつ共通感覚として「良識」を捉え直す。それらに加えて、とりわけ現代芸術の正しい理解のために新たに3つの要素「文脈」、「正しいカテゴリーでの知覚経験」、「個別領域に特化した知見」の必要性を提示する。これらの要素はすべて鑑賞者が陶冶していくことのできる能力であり、この能力をより適切な状態へと高めていくことが理想的鑑賞の態度である。

本論で提示した現代の芸術作品に対する理想的鑑賞の態度は、多様な表現を理解し解釈する段階へと、鑑賞者を導く手立てとなるものである。現代芸術が呈する困惑に向き合い、表現を愉しんで鑑賞するためには、作品を理解することが不可欠である。芸術作品を真に理解した鑑賞が可能になって初めて、私たちは現代芸術の意義や価値を論じることができるようになるのである。